

縄文時代

鳥栖市教育委員会



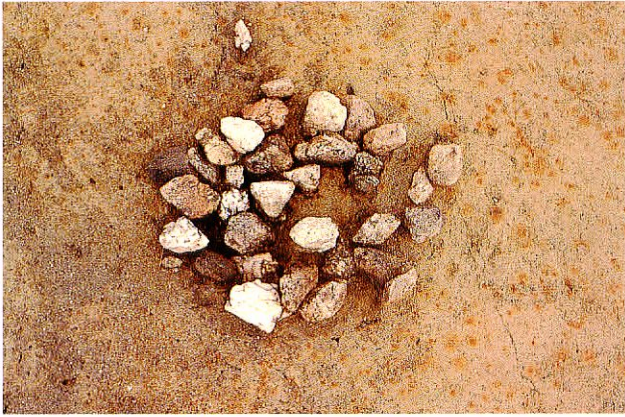
集石遺構（平原遺跡）

今から数万年以上前、地続きであった大陸から移り住んだ人々は、石を打ち欠いて作った道具（打製石器）を用いて、狩猟や採集など自然に依存した生活をしていました。この時代を旧石器時代、あるいは、まだ土器を作ることを知らなかったので先土器時代といいます。市内では過去に柚比町・今町の丘陵一帯で、石刃などの石器類の散布が報告されており、長ノ原遺跡（永吉町）ではナイフ形石器や細石器などがみつっていますが、いずれも3万～1万年前の後期旧石器時代のものであり、また明確な遺構を伴うものではなく、鳥栖地域の旧石器文化は現状ではまだ十分に実態が把握できていません。

およそ1万年前、氷河時代が終わると気候が温暖化し、海水面が上昇して日本列島は完全に大陸と切り離され、今日とほぼ同じ自然環境になりました。人々は新しい狩猟具である弓矢を使いはじめ、土器を作りはじめました。この時代を縄文時代といい、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に区分します。

西田遺跡（山浦町）は早期（約7000～6000年前）の遺跡で、住居跡はみつかりませんでしたが、多数の土器片や石器類に伴って、蒸し焼きによる調理を行ったとみられる石組みの炉など、様々なタイプの集石遺構が多数見つかりました。

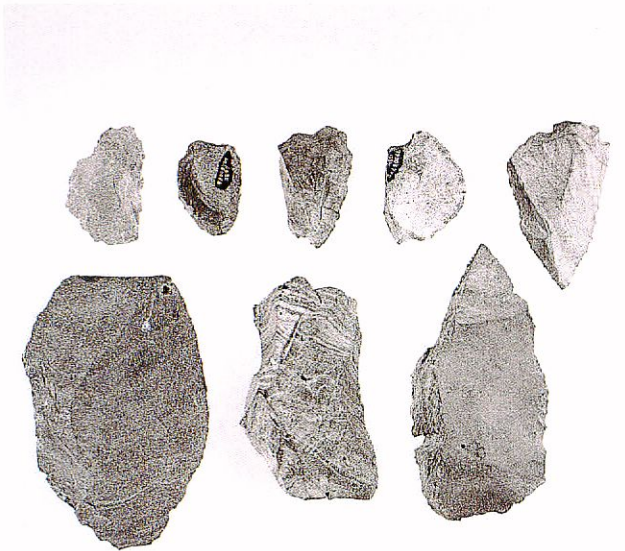
前期から後期（約6000～3000年前）にかけては、いくつかの遺跡で土器や石器が出土しています。鳥栖市内



集石遺構（平原遺跡）



土器出土状況（平原遺跡）



石器（平原遺跡出土）



縄文土器（並木式土器；平原遺跡出土）

では、蔵上遺跡（蔵上町）から後期末の住居跡や主に子供を埋葬したとみられる土器棺墓がみついています。

柚比遺跡群では、長ノ原遺跡（永吉町）と岸田南遺跡（今町）から前期（約6000年前）の轟式土器が出土しています。また、平原遺跡（柚比町）では中期の集石遺構が多数みつかり、かなり多くの人々が生活した場所であったと思われます。また、並木式土器という珍しい土器も出土しています。

晩期（3000～2300年前）になると遺構の発見例が増えます。本川原遺跡（永吉町）からは黒川式土器や夜臼式土器と袋状貯蔵穴、永吉遺跡（永吉町）からは墓の副葬品と考えられる小壺と有柄石剣、梅坂西遺跡（今町）では、動物を捕るための落とし穴とみられる遺構が確認されています。

縄文時代の遺構は、必ずしも良好な状態で残されているわけではないので、一定の広さを決めて、少しずつ掘り下げながら土器や石器を見つけていき、その分布する状態を記録に残し、人の動きを推測するにとどまっています。そういう意味で、集石遺構がまとまって確認された平原遺跡は、当時の人の生活を知る上でたいへん貴重な遺跡であるということが出来ます。